

破瓜の痛みにより和也の背中には爪が立てられ、血さえ滲みでている状態だった。その痛さも、妹の激痛に比べれば屁でもない。

「う、うん……痛いのは痛いけど……」

コハルは兄の呼びかけに目を見開き、健気にも笑みを浮かべた。

「……これで私、お兄ちゃんと繋がったんだね……。嬉しい、大好きなお兄ちゃんとひとつになれたんだ……」

その瞳には、うっすらと滲む喜びの涙。

(コハル……)

その様子に熱いものがこみあげてきて、感動で胸がいっぱいになる。身を引き裂かれるような痛みに襲われているのに、妹は兄との結合を一番に喜んでいるのだ。

「わかるか、俺のがなかに入ってるの？ お前のなかに、俺のチ×ポが根元まで入りきってるんだぜ？」

「うん、わかるよ。お兄ちゃんの、私のなかに入ってる……。お腹のなかにお兄ちゃんを感じられて、私、すごく幸せな気分だもん……」

どこか幼さの残る容顔で、いじらしい笑顔を向けてくるコハル。

ふと結合部に目をやれば、膣口は硬直をずっばりと咥えこみ、目いっぱい広がっ



ていた。少量の鮮血が一筋、陰唇を伝ってシートへと流れている。

それこそまさに純潔の証。乙女が女へと生まれ変わった瞬間の証明。

（コハルは処女だったんだよね……。妹の処女、奪っちゃった……）

その痛々しい光景に、さすがに即座には動けない。その代わり一番奥深くまで繋がったまま、初めて味わう膣内の感覚に全神経を動員させる。

（ああ、これがマ×コのなかか……。すげえ……。温かくてヌルヌルで、入れてるだけでも最高だ……。このまま出しちゃうかもしれないねえ……）

ため息が出そうなほどに心地よい膣粘膜の肉布団。そこは挿入しているだけで至極の快感を与えてくれる柔穴だった。

程よい温度と湿度が織り成す、じつとりとぬめる極上の蜜壺。狭苦しい膣道はきゅうきゅうと締めつけてくるし、その周囲に張り巡らされた肉襞はねつとりと絡みついてくる。極小の突起がうねうねと蠢くため、出し入れしなくとも気持ちいい。内部の焼けるような熱さも相まって、剛直が蕩けてしまいうさだ。

「……お兄ちゃん、もう動いても大丈夫だよ」

しばらくは動かないつもりでいると、コハルが気遣うように囁いてきた。

「でも、まだ動いたら痛いだろ？ もう少しこのまま待ってたほうが——」

「ううん、いいの。だって、お兄ちゃんに気持ちよくなってもらいたいんだもん……。私、お兄ちゃんならどんなに痛くても我慢できるから……」

「コハル……」

妹の想いに心を打たれ、勃起が一段と膨張を増す。

「……じゃあ、動くぞ。痛かったら我慢しないで言えよ」

「うん……コハルのなか、初めてだから気持ちよくないかもしれないけど、できるだけお兄ちゃんが気持ちよくなれるように頑張るね……。コハルのアソコで、コハルのオマ×コでいっぱい気持ちよくなってる」

「ああ、たっぷり味わわせてもらおうからな」

コハルの両膝を手で掴み、ゆっくりゆっくり、慎重に腰を引いていく。ぴっちりと張りつく膣壁に逆らい、少しずつ男根を引き抜いていく。

「ンッ、ふうんっ……」

背中へとまわされていた腕に力がこもる。可憐な容貌が苦痛に歪んだ。豊かな乳房からなだらかな腹部には、じっとりとした汗が滲む。

細心の注意を払って腰を引けば、肉竿は亀頭を残して露呈しきる。無数の青筋を立てている雄雄しい肉棒。その胴回りにはべっとりと愛液が絡みつき、そこには真っ赤

な処女血も混じっていた。その生々しい結合の情景に興奮が加速していく。

「また入るぞ……ほら、ちゃんと息吐いて力抜けよ……」

「う、うんっ……アッ、ンンンッ！」

また腰を押し戻し、狭い膣道を緩やかに押し開いていく。

処女特有の締めつけは、男に素晴らしい快感を与えるものだった。挿しこむ時には無数の襞が歓迎するように絡みつき、引き抜く時には肉ヒダが雁首の返しを引きとめるように逆撫でしてくる。その甘美感は凄まじく、背筋がビクビクと震えてしまう。

（ううっ、すげえ……きついけど、なんつー気持ちよさだっ……）

じゅぶっ、ずぶぶぶっ……。じゅぼっ、ずにゅううううっ……。

下半身より生じる性感到震えつつ、引き抜いては突き入れ、突き入れては引き抜きと、スローペースな抽送を繰り返す。妹の身を案じての緩やかな腰使いだが、じつくりと動かしているため膣内の按配が際立ち、気持ちよくてたまらない。

「ああっ、コハル……お前のなか、たまんねえわ……」

官能に打ち震えながら感想を述べると、コハルが喜びの眼差しを向けてきた。

「……気持ちいいの？ お兄ちゃん、私のなか気持ちいいの？」

「ああ、気持ちいいぜ。コハルのマ×コ、温かくてヌルヌルで、それに締めりがすご

いから……ううつ、激しく突きまくつちまいそうだっ……」

言いながらゆったり腰を使う。と、背中の両腕に力がこめられてきた。妹の身体へとびつたり引き寄せられ、顔と顔とが急接近。

「いいよ、もつと激しくしても。お兄ちゃんの好きに動かして……」

「で、でもお前——」

「ううん、もう大丈夫。さっきまでは痛かったけどもう痛くなくなってきたから……。それになんだか、私もちよつと気持ちよく——シンッ！」

兄を氣遣うように告げ、照れくさそうに頬を赤らめたコハル。

そのいじらしさに抑えていた感情が燃えあがった。これほどまでに健気な妹。和也は欲望の赴くまま、猛烈な勢いでピストン運動を開始する。

「くっ、コハルっ！」

「ああんッ！ お、お兄ちゃん!？」

妹の両膝をがっちりと掴み、その膝がベッドにつくまで倒した。ちようど天を向く格好になる肉穴へ、真上から叩きつけるように腰を打ちこむ。いまだ処女血さえ滲む膣内へ、膨れあがった肉槍を垂直に突き入れていく。

（ああっ、たまんねえ！ コハルのマ×コ、もうむちゃくちゃにしちまいてえ！）